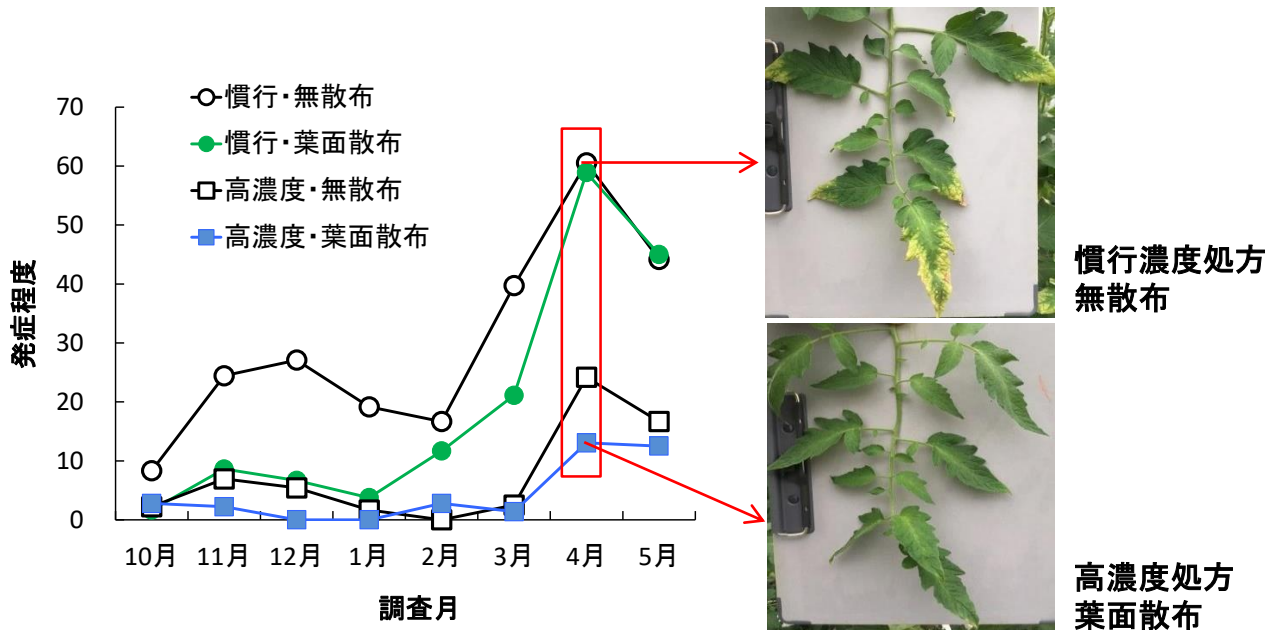


トマト独立ポット耕冬春作型において 葉先枯れ症を軽減する方法を明らかにしました

トマトの葉先枯れ症は、一般に葉中のカリウム不足が原因とされる生理障害です。その発症部位は灰色かび病の一次感染源となり、やがて茎や果実にも感染は広がり、収量が減少するため、産地で問題となっています。

そこで、トマト独立ポット耕の冬春作型における培養液中のカリウム濃度の差異、並びに配合肥料の葉面散布による葉先枯れ症の軽減効果について明らかにしました。



カリウム濃度を高めた培養液処方と葉面散布の組み合わせによる葉先枯れ発症程度の軽減効果

カリウム濃度を高めた培養液処方と葉面散布の組み合わせによる収量への影響

試験区		総収量	可販果収量	可販果1果重	尻腐れ果
培養液	葉面散布	(g/株)	(g/株)	(g)	(個/株)
高濃度	無散布	10,735	9,973	151	3.4
	散布	11,239	10,427	155	3.6
慣行濃度	無散布	10,811	10,065	159	2.8
	散布	11,855	11,180	165	1.5

(研究成果)

・山崎トマト処方1単位を基にした培養液処方のカリウム濃度を50%高めることにより (N-P-K-Ca-Mg : 7.7-3-6-3-2)、栽培期間を通して、葉先枯れの発症程度が小さくなります。

・カリウム濃度を50%高めた培養液処方に、カリウム主体の葉面散布剤を100倍希釈で、2週間に1回、茎葉及び果房に散布すると、葉先枯れの発症程度がさらに小さくなります。

・この成果により、葉先枯れ症が軽減され、灰色かび病への感染リスクが低くなり、収量の増加や作業の省力化 (葉先枯れ部位の切除) が期待されます。※本研究では、灰色かび病予防として定期的に殺菌剤の散布を行ったため、灰色かび病による収量の減少はみられませんでした。